四季のピアニストたち［下］

九月の雨

September in the Rain

佐藤多佳子

四季のピアニストたち［下］

九月の雨

September in the Rain

佐藤多佳子

九月の雨——四季のピアニストたち 下

1993年5月　初版第1刷

作　者　佐藤多佳子

画　家　毬月絵美

発行者　今村正樹

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市谷砂土原町3-5

電話(東京)3260-3221(営業)

3260-3229(編集)

振替　東京5・1352番

印刷

製本　中央精版印刷株式会社・小宮山印刷株式会社

NDC913　150ページ　19センチ

ISBN4-03-744040-7

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

©Takako SATO, Emi MARIZUKI. 1993

Published by KAISEI-SHA, Printed in JAPAN.

偕成社は、平日も休日も二十四時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受けしています。
どうぞご利用ください。電話 03-3260-3221(代) FAX03-3267-0124

九月の雨／もくじ

九月の雨　3

ホワイト・ピアノ　79

装丁／鳥井和昌
装画／毬月絵美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

九月の雨

1

九月はキライだ。とにかく憂鬱(ゆううつ)で、もう、うんざりの頂点の季節じゃないかと俺は思うよ。長い休みの終わり、さらにさらに長い新学期の始まり、休みに慣れた頭と体を学校用に調整するのも大変だが、今、俺を悩ませているのは、何といっても、胸の奥のこのダルさだった。

だるいんだ。強烈な残暑。夏がじりじりと火葬されていくみたいな不吉な日差し。一転して、雨。終わりがないような九月の雨。

ダルいの、タルいのって言っても、別に病気じゃない。誰にも同情してもらえない類のささやかなメランコリーさ。ここンとこの俺は、まるで晴雨計のようにぴったり機嫌が切り替わる。

そういえば、昔、天気によって、色の変わる猫のおもちゃがあったな。あんな風に俺も皮膚の色が変わるといいのに。雨の日はピンクに、晴れの日は水色に。あれ？　逆だったけな？　曇りの日つまり、地の色は、確か灰色がかった紫だった。小さくて、ありふれたスタイルで、どことなくメランコリックな顔つきをした猫だ。あいつをもう一度見たいな。どうせなら、生きている奴がいいね。灰紫のお天気猫チャン。

雨の音がピアノの音色の中に溶けていく。昨日も雨。おとといも雨。猫は毎日ピンク。当分はぐずついたお天気が続くでしょうと、天気予報のおじいさんがテレビで言っていた。九月の長雨。そして、母さんは、語呂合わせのように、陳腐な洒落のように、スタンダード・ナンバーを愛用のグランド・

ピアノで弾くのだった。『セプテンバー・イン・ザ・レイン』――九月の雨。

「広一」

ピアノの音がとぎれ、居間のガラス戸ごしに雨を見ていた俺の脇に、いつのまにか、母さんがふらりと立っていた。

「あたし、この週末は、家にいるんだけど、あんた、何か予定ってある？」

「ナイよ」

「ああ、そう」

母さんは、口をすぼめ、眉をひそめ、お定まりの表情を作り出した。何か言いにくいことをしゃべる時の前触れだ。

「誰か来るの？」

俺は先手を打った。なにしろ勘の鋭い子供なもので。

「うん。種田さんがね。来たいって」

「いいよ。じゃ、俺、友達ンとこ、行くからさ」
とてもとても物分かりの良い子供なのだ。
「だめよ。あんたがいなくっちゃ」
俺は一瞬、ドキリとした。
「えっ？　何？　もう、そんな話、出るの？」
俺たちは、真顔で見つめあった。長身で独身で癖っぽい美人で、ちょいとマイナーなジャズピアニストの母親は、心底、憂鬱そうにため息をついた。
「違うわよ。バカだね。あの人は、いつだって、あんたに会いたがるじゃないの」
口調がいつになくトゲトゲしていた。
「ただのゴキゲン取りさ。将を射んとすればって奴じゃないの。二人で会いなよ。俺、恋人の息子役って、キライ」
「かわいげないね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

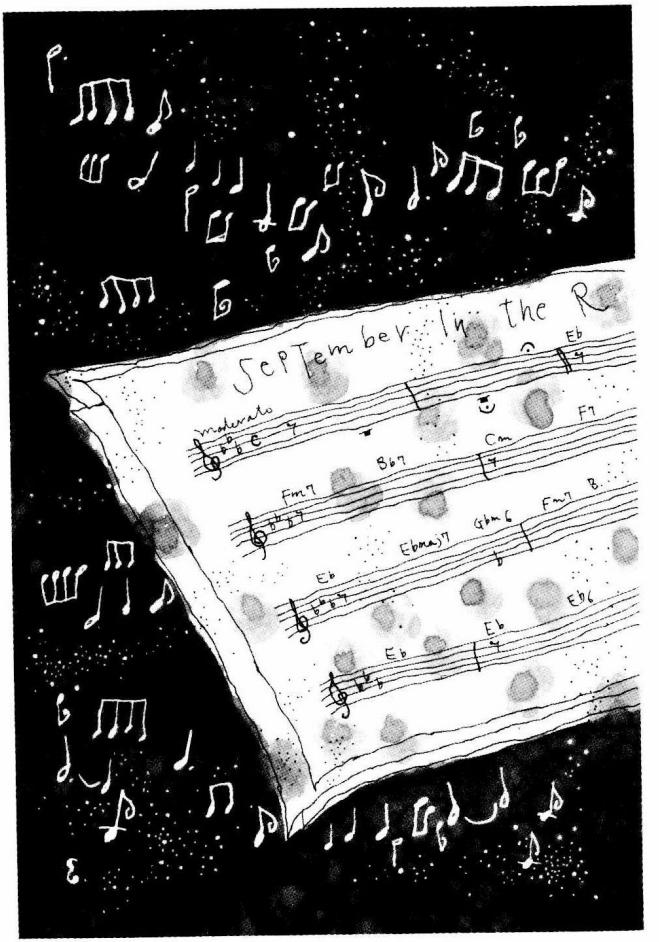
「だって、もう、バイクの免許が取れる年だよ」
俺はさりげなく会話の雰囲気を変えようとしたが、母親は乗ってこなかった。それどころか、いつになく哀願するように声を湿らせる。
「ねえ、広一。お願いだから」
オネガイダカラ――男は女のこの台詞にめっぽう弱い(そうだ)。でも、俺は男だけど、彼氏じゃなくて息子なんだ。何も泣き落としにかけなくてもいいじゃないか。その辺のケジメはつけてほしい。
「二人きりになるのはイヤなのよ」
じゃ、なんで、家になんか呼ぶんだよ！　俺はその言葉を飲み込んだ。まったく！　水もなしで、巨大な錠剤を一気に飲むようなもんさ。
「わかったよ」
「うん、ゴメン。よろしくね」
結局、母さんは思い通りにする。いつだってそうだ。一度、パターンが定

着すると、それをぶちこわすには、すごいパワーが必要だ。今、俺はダルくて、パワー不足、ガス欠だ。

俺はぼんやりと、『パターン』のことを考えた。昔はどうだったんだろう。ガキの頃。まだ、父さんが生きていて、三人家族だった頃、いったい、誰の言葉が家の中で一番、力があったっけな。――だめだ。うまく思い出せない。イメージが弱いんだ。そんなに昔々のことじゃないのにな。

父さんが自動車事故で死んでからまだ七年しかたっていない。運転席の父さんは即死、助手席の俺は左腕をつぶされ、以来、義手をつけた生活。『大惨事』だ。母さんにとっても俺にとっても、あの事故は、太くて真っ黒の恐ろしい直線のようだ。人生が真っぷたつに分けられる。それ以前とそれ以後。

母さんも俺も、『それ以後』が、相当にキツかったもんだから、あんまり『それ以前』の思い出に涙する暇がなかった。母さんはプロのピアニストとして家の大黒柱をめざし、俺は片手の生活に自分を慣らす。俺は、わずか十


September In the R
moderato
Eb
Cm
F7
Sb7
Fm7
Ebmaj7
Gbm6
Fm7
B
Eb
Eb6
Eb
Eb

六年の『駆け出し』だが、すでに二つの人生を生きてきた気がする。大袈裟かな。でも、そう思わないと、今、がツライ。あれはあれ、これはこれ、たぶん、俺は年にしては、いやらしく、クールに育っているんだ。

俺は自分の部屋に行き、机の引き出しから父さんの写真を引っ張り出した。三人で住んでいた家を引っ越して以来、母さんは一度も死んだ夫の写真を飾っていなかった。俺もそれにならった。暗黙の了解というわけ。

薄情者の母子なのではない。たぶん、俺たちは、写真立ての中に閉じ込められた父さんの姿を見たくなかったのだと思う。写真はどれも父さんによく似た別人だった。ちがう、と思う。それでも、その違いは説明のしようもなく、生身の父さんを頭の中に呼び返してみては、もどかしさ、悔しさに息がつまった。

手元の写真の父。バンドの仲間に囲まれてなんとも気持ち良さそうに笑っ

ている。片手にテナー・サックス。くちひげとほおひげをはやし、細めた目がとても若い。年齢不詳のダンディー。でも、この時は確か、もう四十を越えていたっけ。

俺は今、父の写真などを見ると、申し訳なく、気恥ずかしく、妙に後ろめたい心持ちになる。母さんを守ってやれなかった、と、どうしても思ってしまうのだ。

母さんは、夫の死後、二年目にして、新しい恋人をつくった。それが、早過ぎるか、否かはどうでもいいんだ。だって、『時効』なんて、誰にもつくれやしないだろ。俺はむろん平気じゃなかった。小学生だったし、腹もたったが、なにしろ本音はびくびくしていた。これ以上、どんな不幸がやってくるのかと思った。父ばかりか母までが、俺の手の届かないどこかへ行ってしまう気がした。

でも、母さんは堂々としていた。明るくてちっともこそこそしていなかっ

たし、バンドのドラマーの彼氏は、すごく素敵な人だった。母さんより二つ年下だったけど、やはりヒゲをはやしていて、父さんの仲間で、父さんを尊敬していた。母さんは、結婚したい、と言った。俺は、いいね、と答えた。でも、二人の仲はわりとあっけなくこわれた。

それからも、母さんは、何人かの恋人をつくり、いつも家に連れてきては、嬉しそうに俺に紹介した。二度、婚約した。そして、決まって、喧嘩別れ。

母さんはわがままで、『ええかっこしい』だ。でも、俺は気づいてしまった。母さんの恋人には必ず二つの共通点があることに。一つ、音楽家。一つ、渋いハンサム。

母さんは、父さんを探している。

賃貸マンションの薄い壁を突き抜けて、母さんのピアノが聞こえてきた。ああ、また、同じ曲。セプテンバー・イン・ザ・レイン。もう、このうっと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c